たった一人のためにでも、世界をつなげたい。

NEWSLETTER NO.7

CWS JAPAN
Church World Service

11月30日
「ララ70周年記念フォーラム」いよいよ開催
ララとCWS、関係の謎も明らかに
―ララの想いを、未来の人道支援へ―

ララとCWSのはじまり

CWSは、ララが組織化(1946年4月)された翌5月、ララ発足に関わったChurch Committee for Relief in Asia(アジア救済教会委員会:CCRA)を吸収し、世界的救済活動を行っていた3団体※によって設立されました。目的は、第二次大戦の被災国救済と再建活動を調整することでした。CWSは、多数のプロテスタント教会を傘下に収め発足した事で、以後ララ救援活動において多大な勢力を持つ事になりました。

1951年1月に厚生省社会局から刊行された『ララ救援物資について』には、CROP(Christian Rural Overseas Programの略称:CWSのファンドレイジング運動)によって、各農村から集められた小麦、野菜等の農産物などが、CWS又はルーテル救済団を通じて日本へ送られた、と記載されています。その割合は、ララ物資総量の55%～60%を占めました。70年という時を経、今日のCWS米国本部関係者には、ララ物資とCWSのことを知る者が生存しておらず、またCWS内部に歴史史料が保管されていないため、この事実は日本事務所以外ではあまり知られていませんでした。

※3団体＝Federal Council of Churches(教会連邦協議会)・Foreign Missions Conference of North America(北米海外宣教協議会)・American Committee of the World Council of Churches(世界教会協議会・米国委員会)

ララとCWSをつないだ「ララの父」G.E.バット博士

終戦後の混乱の中で「ララ」を通じて、戦勝国アメリカと敗戦国日本の友好を築いた立役者は、戦前から日本に宣教師として赴任し、生涯をかけて日本に奉仕したバット博士、ローズ女史、マキロップ神父(1947年にフェルセッカー神父に交代)という三人のララ代表です。中でも「ララ」とCWSをつないだ重要人物が、ジョージ・アーネスト・バット博士です。『愛 わがプレリュード カナダ人宣教師G.E.バットの生涯』(1994年 新堀邦司:著)によると、バット博士はCWS日本代表として、日本側のララ中央委員会実行委員長を務めていました。

左:バット博士

ララ中央委員会三代表
United Church Archives, Toronto.
2000.017P/3942. Directors of LARA, [195-?]

ララの参加13団体(NEWSLETTER NO.6参照)にも入っていない「カナダ合同教会(UCC: United Church of Canada)」の宣教師であるバット博士が、なぜ米国の組織であるCWSの日本代表に任命され、ララの中心人物となったのでしょう？「バット博士が、日本語を話し、戦前に宣教師として日本で活動していたから」という理由だけではないと思われました。

調べてみると、設立時CWSを構成した一団体だった「北米海外宣教協議会」の議事録とバット博士の手紙が「カナダ合同教会(UCC) 公文書館」の資料の中にありました。バット博士が所属していた「カナダ合同教会(UCC)」は、「北米海外宣教協議会」に1930年代から加盟しています。CWS設立の二か月前、日本に再赴任した当初のバット博士の所属は「アジア救済教会委員会(CCRA)」となっています。バット博士は、カナダを代表する宣教師団派遣第一陣として、「カナダ合同教会(UCC)」が加盟する、ララを支えていた「北米海外宣教協議会」へ派遣され、ララ発足団体の「アジア救済教会委員会(CCRA)」として日本へ赴任したのでした。「カナダ合同教会(UCC)」と「CWS」と「ララ」、そして「日本」をつないだのはバット博士だったのです。

戦前、日本で宣教師として活動していたバット博士は、開戦後、他の宣教師が次々と引き揚げる中、1942年まで日本に留まりました。そしてカナダへ帰国後すぐに終戦後日本で行う救援活動のための準備を進めていました。博士は、「ララ」と「CWS」の発足前、1946年3月に、「北米海外宣教協議会」から任命を受け、日本に向けて出発しました。その一か月後の4月に「ララ」が組織化、2か月後の1946年5月にCWSが組織化され、博士の所属は「CWS」となりました。そして「ララ」発足に当り、他の二人の代表と共に三人目の代表として、既に駐日していたバット博士が選ばれたのです。

博士は、陸軍大佐の資格を与えられ、軍用機で日本中を飛び回り実態調査を行い、本国に日本の惨状を報告。強力な即時救援を求めました。豊富な社会事業の実務経験を持っていた博士は、「ララ」代表として、またララ中央委員会の委員長として、名実ともに日本におけるララ事業の中心的存在でした。しかし「ララ」の終結を目前に、過労のため突然急逝されました。最後まで「ララ」事業のけん引役として日本全国を飛び回った、真の社会事業家でした。

ララ5つの精神

ララ中央委員会実行委員長として、バット博士は次の5つの基本方針を立てました。

第一：援助を必要としているあらゆる人々に「公平」に援助物資を配分すること。

第二：ララの実施に際し、外国人はできるだけ表に出ないこと。配分計画や実施の具体的な活動は日本政府に任せ、ララ三代表は、裏方に徹し、外国への物資要請やGHQとの難しい折衝にあたること。

第三：ララ物資を受けることにより、日本人が依頼心を起こしたり、自尊心を失うことがないように配慮すること。

第四：官民協働によりこの運動を進めることへの配慮を行う事。ララはどこまでも民間人の自発的な運動であるため、アメリカ政府やGHQの力が及ばないように努める事。

第五：日本人が復興を成し遂げた時、国家・民族・人種・宗教・政治的イデオロギーなどあらゆる相違・対立を超え、世界の人々と協力し分かち合う国民となり、今一度ララの精神を想い、他国の困っている人々に、同じような運動を行えるよう要望する。

バット博士と孤児
United Church Archives, Toronto.
76.001P/521. [Rev. G.E. Bott with orphans in Japan], n.d.

この「5つの精神」を知ると、支援していた北米側が、ララ支援という大事業を行い日本に多大な貢献をしながらも、その実績を後世に敢えて伝えようとせず、記録はカナダ合同教会の公文書館に静かに収蔵されていただけだったという事、支援を受けていた日本側もララを支えていた人達の事をあまり語ることはなかった事に思い至ります。この「5つの精神」に現れた公平・公正さと、ララに尽くした支援者側の日本人に対する様々な配慮や謙虚な姿勢が、今70年を経て、他国に支援を行う経済大国に成長した私たちの立場を考えさせます。ララの精神は今日の人道支援に受け継がれているでしょうか？また国内外において今後どのような人道支援を行っていくべきでしょうか？来る11月30日の「ララ70周年記念フォーラム」では、ララの精神をふり返るとともに、今日の人道支援のあり方を考える場を創りたいと考えています。

栃木県塩谷町
放射性廃棄物処分場候補地を訪ねて

―全国有数の名水の水源が放射性廃棄物最終処分場に―

「311受入全国協議会」は、CWS Japanが支援する団体です。この「311受入全国協議会」が主催する「交流事業 in 塩谷」が、9月10日、11日、栃木県塩谷郡塩谷町で開催されました。この第一日目に行われた「放射性廃棄物最終処分場候補地見学会」に、CWS Japan国内事業プログラムオフィサー牧由希子が参加しました。現場見学終了後、見形塩谷町長から町が抱えたこの候補地問題についての説明がありました。当日のプログラム参加者数は、44名。県内から6団体、県外からは15団体の参加がありました。

緑豊かな水源周辺と名水表示
撮影:牧　由希子

塩谷町は、栃木県の北部に位置。東に矢板市･大田原市、西に鬼怒川温泉･日光、南に宇都宮市、北に塩原温泉･那須温泉をひかえた人口約12,000人の農林業を主体とする町です。北部は、国立公園の一部である高原山(たかはらやま、たかはらさん) で、林産資源に富み、いずれも一級河川の荒川(東側)と鬼怒川(西側)が、町の両側を囲みながら南流し、中部から南部にかけて肥沃な農業地帯となっています。

この塩谷町に、平成26年7月30日、突然、井上環境副大臣(当時)が、福田栃木県知事を同行して訪れました。町内にある国有林の一部が、原発事故後排出された放射性物質を含む「指定廃棄物」の最終処分場建設候補地として、詳細調査候補地の選定がされたとの環境省からの提示でした。

提示は、地元にとって、青天の霹靂でした。なぜなら候補地の敷地内には、環境省が全国名水百選にも選んだ、高原山の中腹十数カ所から湧き出る尚仁沢湧水(しょうじんざわ ゆうすい)があり、さらに候補地に隣接して西荒川の源流があります。西荒川は東荒川と合流し荒川となって、那須烏山市で太平洋に注ぐ那珂川本流に合流します。また尚仁沢湧水は農業用水を通って鬼怒川にも注いでいます。塩谷町担当によると地下水脈は首都圏へも及んでいると言います。またこの地域は尚仁沢自然環境保全地域に指定され、ブナやミズナラの天然林と人工林が混在し、イヌワシ、クマタカ等の貴重種の鳥やニホンアカガエル、アズマヒキガエルなどの減少しつつある貴重な生物が生息していると言います。焼却炉付廃棄物処理場の建設工事を開始する事による水源のダメージは大きく、さらに水量が豊富である事から、上流での土砂崩れ、落雷の多い地域特性、経年経過による土地の大幅な変化なども考慮すべきだと、この会合では説明していました。

この「指定廃棄物」の最終処分場建設候補地選定は、副大臣訪問の翌日7月31日に開催された環境省主催第5回栃木県指定廃棄物処理促進市町村長会議で、発表され(出席･環境省:石原大臣･井上副大臣(当時)、栃木県:福田知事、馬場副知事他、県内全25市町)、塩屋町が、5ヵ所の候補地のなかで条件を満たす点数が一番高かったとの資料が提出されました。

塩谷町は、8月5日臨時町議会を開催。町民は8月7日、処分場反対組織(塩谷町民指定廃棄物最終処分場反対同盟会)設立しました。8月17日、指定廃棄物最終処分場候補地の詳細調査反対と白紙撤回を求める住民集会(宮城県加美町主催)に、町長･副議長･他町議会より2名、反対同盟より2名、町職員2名が参加し、8月20日、町議会から内閣･衆議院議長･参議院議長･環境省に宛てて候補地の白紙撤回を求める意見書を提出しました。以降、約2年間、公開質問状提出や再測定の要望など自治体と住民は、そろって反対運動を繰り広げてきました。しかし、この見学会の直後、平成28年9月14日、伊藤環境副大臣(現職)が、就任の挨拶に塩谷町庁を訪問。再度詳細調査への協力を依頼する文書を町に手渡しました。(栃木県塩谷町ホームページ『指定廃棄物最終処分場候補地選定までの経緯と現状―詳細候補予定地の選定結果からの経過―より)

この塩屋町の反対運動に特徴的な事は、自治体･住民とも足並みをそろえ、反対の立場をとっている事です。

町の水源を守る姿勢は、今回の候補地発表がある以前から定まっており、自然保護条例の制定準備を進めていました。そして平成26年9月19日、条例第23号によって「高原山･尚仁沢湧水保全条例」を制定しました。この候補地選定問題以降、放射能に対する町の意識も変化し、同町では甲状腺エコー検査の補正予算を町民のために計上するという決断をしています。

◀秋の実りと「処分場建設絶対反対」の文字
撮影：牧　由希子

今後の塩屋町の「困難」は、大きなものがあります。また放射性指定廃棄物処理の行方についても、多大な困難が予想されます。

全ては、2011年3月11日東京電力福島第一原子力発電所における大規模な原発災害から派生している事は間違いがありません。

原発事故によって派生する社会的インパクトは、現在の人類における社会的環境的コストを優に超えているのではないでしょうか。

※「311受入全国協議会」とは、2011年の福島第一原発事故による放射能汚染や被ばくを避けるための被災者の移住や、子供たちの保養を推進するための情報提供をはじめとする様々な支援を行っている全国ネットワークです。

宇都宮大学・大学コンソーシアム栃木主催：国際キャリア開発プログラム合宿セミナー
「International Career Seminar」
―人道支援におけるリーダーシップ―
於：10月8～10日　宇都宮大学国際学部

宇都宮大学セミナー参加者と小美野事務局長（前から3列目左から4人目）

10月8日から10日にかけて「宇都宮大学」及び「大学コンソーシアム栃木」が主催した、国際キャリア開発プログラム合宿セミナー「International Career Seminar」へ、小美野剛事務局長が講師として参加しました。

50人強集まった学生たちは将来国際的な仕事がしたいと考える将来の希望の星たちです。講義は2泊3泊の集中合宿制で、3日間という短い時間でしたが、学生の新しい事を学ぶ吸収力や感性の鋭さに圧倒されるセミナーでした。

CWS Japanとして担った題目は、「人道支援におけるリーダーシップ」。これからキャリアを選択していくにあたり、その選択肢の一つとして「人道支援業務」を知り、なかでも重要な「リーダーシップ」の要諦を学び、今後どう活かすかを自分の言葉でプレゼンテーションする、というものです。最初は手元資料を見ながら、しどろもどろだった学生たちが、最後は堂々と自分の言葉で発表する姿に、心を打たれるものがありました。

CWS Japanは、将来の国際支援を担う若者たちと、積極的に学びを共有出来れば、と考えています。

CSVフォーラム「More Impact Japan 2016」開催

―熊本地震から学ぶ、企業とNPOの社会的インパクト協働のあり方―

於：10月3日　明治学院大学大会議場

CWS Japanが加盟する「JAPAN PLATFORM」「防災・減災日本CSOネットワーク（JCCDRR）」両ネットワークが共催し、CSVフォーラム「More Impact Japan2016」が、去る10月3日開催されました。今回のこのフォーラムは、下記のような多岐に亘るネットワークや国際機関が関係し開催されるという、まさに防災・減災および人道支援の、これからの新しい展開が予測されるフォーラムとなりました。

共催：「防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）」「特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム（JPF）」
協力：明治学院大学ボランティアセンター」「一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン」
「アジア防災NGOネットワーク（ADRRN）」「国連人道問題調整事務所（OCHA）」「国連世界食糧計画（WFP）」
後援：「1％（ワンパーセント）クラブ」

世界中で増えつつある災害や紛争。そのただなかで、日本や世界のNGO/NPOは、人道支援・災害被災者支援のために日々活動しています。より多くの成果をもたらすためには、一団体だけではなくビジョンを共有した多様な組織・機関の連携、新しい発想や技術革新の導入が必要とされています。一方で企業においても、社会における「共有価値の創造」（Creating Shared Value：CSV※）の考え方の重要性を認識する企業が増え、社会課題の解決に自社の持つ特徴や技術を活かし、優位性を確立しようという動きも大きくなってきました。災害支援や防災活動という観点において、自社プロダクトやサービス、人的リソースを活用しながらNGO/NPOと協力していくための試みが模索されています。

そして、2016年4月に発生した熊本地震。このフォーラムは、熊本の被災地で支援にあたったNGO/NPO・国際機関、および企業の当事者という異る立場の組織機関から、現場の活動報告を受け、「その時現場で何が起こっていたのか」を認識し、共通の視点を得、次の効果ある連携を生み出すために開催されたものです。

学生も交え、今後の国内災害、および海外での人道・災害・開発支援における、社会貢献と事業収益性が両立した「サステナブル（持続可能）」な支援や、事業・企業活動の有り方について、発表・議論が行われました。

これからの支援活動現場において、連携・協働により大きな可能性と実現性がある、との発表があり、またそのためには平時からコミュニケーション・協働の骨組みを作っておく必要性がある、という意見が、それぞれ異なる立場から、言葉を変えて、一様に発表された事が印象的でした。非営利・企業・行政が、それぞれの「強み」を活かし、お互いに協働し、最大の支援効果が出せるよう、日常からの議論・取組・模索が必要だ、という合意を見た、貴重なフォーラムでした。

※CSV（Creating Shared Value）とは、2011年にハーバードビジネススクールの教授であるマイケル・E・ポーター氏とマーク・R・クラマー研究員が発表した論文『Creating Shared Value』（邦題『経済的価値と社会的価値を同時実現する共通価値の戦略』）で提唱された考え。日本では、「共通価値」「共有価値」などと訳される。CSVは、企業にとって社会的な課題を自社の強みで解決することで、企業の持続的な成長へとつなげていく差別化戦略となるとされる。

多様な立場の組織・機関の方々によるパネルディスカッション。コーディネーターはCWS Japan小美野 剛事務局長（一番左）

新しいスタッフをご紹介します！

―二人とも、力強く、前向き。それぞれ既にCWS Japanの大事な戦力―
海外事業担当 阪口佳恵、事務局アシスタント 森由美の二人です。

右：阪口佳恵　左：森由美

阪口佳恵：自己紹介：

9月20日より海外事業担当としてCWS Japanの一員になった阪口佳恵です。出身は大阪です。これまでは工業系民間企業でマーケティングを担当し、アジア地域女性職員のネットワーキング・自己啓発サポートにも携わりました。彼女たちとの交流から、コミュニティの中で普段から重要な役割を果たしている、女性のキャリア形成・社会問題への参加、教育の大切さについて考え始めた事、実際に被災地での活動に参加し、災害に耐えうるコミュニティ作りについて考えた事が、当団体へお世話になるきっかけでした。

“人道支援”や“国際協力”分野への挑戦は、私にとってたいへん大きな転機です。海外事業担当として一ヵ月が経ち、私が感じたこと。それは現地パートナー団体と「つながる」ことです。被災者の今や、現在進行形の変化を「知る」。そして「共感する」ことからはじめたい、と思っています。将来は異なる分野や世代の方たちとの出会いや交流を通して、防災・ジェンダー・教育が重なる分野で、改善にお役に立つことができたらと願っております。現在は若年層を対象とした防災教育ファシリテーティング、ファンドレイジングの基礎を学んでいます。

毎日オフィスで飛び交う言葉や実務の一つ一つが新鮮で、学ぶ事のほとんどは、昨日まで知らなかったことばかりです。そんな私の疑問に真摯に答えてくださるのは、オフィスの先輩たちです。みなさんエネルギッシュ、そして正直に申し上げて、ユニークな面白い方たちです。意見をもつ、違う意見に耳を傾ける、学ぶ、続けることを大事にしているんだな、そんな印象を受けました。

東京へ引っ越してきたばかりなので、最近はさぼっていますが、趣味のジョギングと水泳を、また始めたいと思っています。読書も食べることも大好きです。東京の街をたくさん歩いて新天地を知ろうと思っています。

皆様、ご指導のほどよろしくお願いします！

森 由美：自己紹介

事務局アシスタントとして6月より勤務している森由美です。私がCWS Japanに応募する大きな動機となったのが「CWSがララ物資の送り手だった」ことです。ですから、11月30日開催のララ物資70周年記念フォーラムの準備に携われることに、喜びとやりがいを感じています。

私は他NGOでの勤務経験もありますが、CWS Japanで勤務を始めて驚いたことは、スタッフ皆がエネルギッシュに多くのタスクを同時進行でこなしていることです。オフィス全般のサポートが役割の私としては、みなさんのサポートに、自分の体が二つほしいと感じることもありますが、明るく暖かいCWS Japanの気風に助けられ、日々前向きな気持ちで業務に臨んでいます。

仕事を離れた趣味は、ちょっとしたものを手芸で作ることです。実は、たまにオフィスに自作の服を着てきたりもしています。運動はあまり得意ではありませんが、今よりずっとやせていた時代に、クラシックバレエを少し踊っていました。今でもバレエを観ることは大好きです。

CWS Japanがよりよい活動を世界にお届けする助けとなるべく、今後とも励んでまいります。